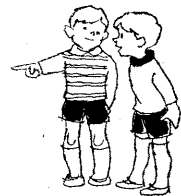


三月の幼稚園と四月の小学校

牛 島 義 友



一、教師の立場

このような主題に面すると幼稚園の教師としても最後の重要なしめくりの時期にでも当面しているような感じがする。しかし、幼稚園の教師としては、三月ともなればもはや何もすることはなく、小学校の教師の側にこそ新しい時代に即応した受け入れの準備の必要な時である。

幼稚園は他の上級学校に較べて、もっとも純粋な教育指導のできる場所である。上級学校、特に中学校では、高校入試のためにその教育は影響され、有名高校ともなれば大学の予備校化し、独自の教育などは困難となっている。ところが幸いに幼稚園は、小学校の準備などする必要はない。小学校は義務教育であるので

どんな子どもでも入れてくれるし、幼稚園は入園が随意にまかされているので、小学校入学の準備としての教育などは考える必要はない。

また小学校では小学校で学習することを幼稚園で教えることは好ましくないとされているので、知的な準備教育はしないことが望ましい。ここではただ幼稚園の教育目標、特に社会性の育成や生活指導に重きをおいた独自の指導を行なっておればよい。三月ともなるとこれらの指導が完成する時期で最後の仕上げは必要かもしれないが、小学校入学にそなえての改まった指導は全く必要としない。

問題はむしろ小学校の受け入れ態度にある。以前幼稚園保育を経験する子どもの少なかった頃には幼稚園経

驗児は必ずしも歓迎されなかった。教師に慣れ親しむとか、学校の規律に従わないなどといわれたり、幼稚園経由者は低学年ではよいが、あとでは伸びず、反対に幼稚園教育未経験児の方が後によくならないといわれたものである。受け入れ側の小学校の教師の心には、幼稚園無用論的要素もなかったとはいえない。

しかし今日は、幼稚園と保育所の経験を経たものが六割以上七割近くにもなってきたので、この情勢に応じた受け入れの心構えが必要である。幼稚園は社会性の指導に重点をおいていたから、学校生活への適応はうまくいくはずである。小学校入学に当たったの適度の緊張感はなく、しかも自発的に行動したり発表したりする準備はできている。この状態を教師に慣れるとか、規律に服しないとみないで新入生はすぐ学習指導をうける心の準備ができていると評価してほしい。

また幼稚園側としてはこのような社会性や性格における指導記録を小学校側に伝達して、小学校の指導の便宜に供することが必要である。今日スクールホビアにかかるものが意外に多く、小学校では学習以前の問題で悩むことが多いが、これは幼稚園での指導、連絡がよくなされることによってかなり改善されるであろう。

小学校教師としては新入生たちの知能個人差の多いことを考慮してほしい。幼稚園において問題となる個人差は主として社会

性、性格における個人差であり、これを適当に指導してどの子どもよい社会的適応ができるように導いてきた。

しかし小学校になると知的個人差が重要な問題となってくる。本来の知能がかなり相違する。IQ一三〇の子どもが歓迎されるならば七〇の子どもも同じぐらいの割合で当然クラスの中に含まれる。否、IQ一五〇から五〇までの子どもがいてもむしろ自然であって、これらを一緒に指導するのが教師の義務である。

以前幼稚園で少しばかりの文字の学習をすると、小学校の側としては文字を知っている子どもと知らない子どもがいるので、指導がしにくく困るといわれたものである。しかし小学生の知能個人差は少しばかりの仮名を知っているか、知らぬかぐらいの差ではなく、精神年齢に直せば三歳から九歳までの子どもが一緒に入学してくるものである。知能の少し低い者をすぐ特別扱いにし、正常の教育の対象でないなどと考えず、IQ五〇以上の子どもは正常のクラスにふさわしい者として指導してほしいものである。

なおこれに関して幼稚園側への希望を述べると、幼稚園ではいわずゆる学習を行なわないうわけであるから、知的な個人差はそれほど問題とならないので、入園にあたり知能検査類似のものを行なって知能優秀児を選抜することは厳に慎んでもらいたい。幼稚園は私立だから勝手だという心構えでいると、やがて公立幼稚

園におきかえられてしまふであろう。知能が少しぐらい低い子どもも幼稚園の環境におけば、かなり知能が進歩することがカーク博士の研究などで明らかにされている。知能の弱い子ども十分小学校教育に耐えられるように備えてやるのが幼稚園教育の副次的効果であろう。

二、親の立場

幼稚園から小学校に移るに当たっては親の態度こそ最も大切である。幼稚園も小学校も今日では学校体系の一部であるし幼稚園の中には小学校と変わらないような画一教育をやっている所もあるかもしれない。しかし、両者は根本的に性格が異なっている。

幼稚園は家庭生活では不足する社会性の訓練や集団生活を通しての生活指導を行なう。したがって家庭教育と深いつながりを持っており、もし家庭の中で兄弟数や友だちなどが多くて十分社会性を育成することができれば、必ずしも幼稚園に入れなくともすむものである。また社会性を養う場は遊びの場であり、この点でも家庭の生活とつながっている。

また幼稚園の教師は、以前の保母の名が現わすように母親的性格を持っており、教師的な権威ではなく、母親的なやさしさを持ち、幼児は容易に親しむことができる。友だち関係では威圧や劣

等感を感じても先生はそれを防いだり治してくれる存在である。

それで子どもが幼稚園に行くことによって過度の緊張をすることもない。ところが小学校は学習をする場であり、しかもそれは遊びながらではなく、遊びと勉強とはつきりけじめをつけた注意の集中が要求される。またこのためには遊びはなく、一定の教室が必要となる。これはできるだけ子どもの注意を集中させ、教師の教えのみを聞くことのできるような雰囲気構成されている。

たとえば学童たちは自分のきまつた席につき、机の上には教科書だけを開き、その目は常に先生の方を向くことが要求される。

またとなり近所の子と自由に私語することは許されない。集団ではあるけれど、一人一人の子どもが一对一の形で先生と向かい合っている。しかもこの先生は母親とちがひ、毎時間子ども知らない新しい知識を教えて下さる。しかもそのおもしろいお話をただ楽しんでおればよいのではなく、あとで「さて今日はどうな勉強をしましたか」とたずねられたり、「来週はテストですよ」といわれるので、先生の教えは全部頭に入れねばならない。また「廊下は静かに歩くのですよ」とやさしく教えられるが、それにそむいた場合にはきびしく叱られる。したがって教師はえらくこわい権威的存在となる。このように緊張した雰囲気の中で権威的な教師から指導されるのが学校である。したがって学校は家庭と根

本的に相違しており、家庭の延長などといったものではない。

このために子どもは学校では皆よい子になろうと努力し、かなり緊張している。それだけに家庭に帰ると緊張解消を求め、親のいうことをわざと聞かなくなる傾向がある。

このように家庭生活と余りにも違った学校生活にいきなり入ることは望ましいことではない。したがって学校側でも低学年の指導ではなるべく家庭的雰囲気を持ち、教室も学習の場というより生活の場とし、友だち同士が話し合ったり、協同して仕事をし、教師も教壇を取り払った指導を行なっている。

したがって親の方も新入する子どもに対し「これから学校では家のように我がまませず、きちんとせよ」とか「先生のおっしゃることはよく聞くのですよ」などといわぬ方がよい。先生のいうことをよく聞けということとは反面、親のいうことは聞かなくともがまんするが、ということを含んでおり、親みずから家庭教育を放棄した形になってしまふ。小学校低学年においては、家庭教育がなお強力に行なえることが望ましい。このためには家庭でも、また子どもは教育されねばならないという心構えが必要である。ドイツの学校では以前から午前中だけの教育をしていたが、この理由の一つはドイツの親たちは子どもが余り長く学校にいることを好まず、子どもはまた家庭でも教育されねばならぬと考え

ているためである。教育はすべて学校におまかせする態度は、親の持つ基本的人権としての親の教育権を自ら放棄するものである。

したがってこれからの親は子どもの教育について教師と同じように、いや文部省と同じように、大きな夢と計画を持つ必要がある。ただ有名校に入れるとか、他の人と同じようにおけいこや塾に通わすというのではなく、この子をどのような人間に育てようとするのか、親の教育理想を描き、またその子の個性、家庭の事情などを考えて具体的な子どもの人間形成や進路指導をする必要がある。もちろんこの場合に教師や専門家の助言を素直にきく必要がある。しかし先生まかせ、他人まかせではなく、親が自主的な態度を持つことが必要である。

子どもが成長し、新しい世界に進み入ることは冒険であるが、親が子どもを育て人間形成をすることも一大冒険である。否、親自身の生活だつてたえず本質的な不安に満ちた冒険であろう。生き甲斐のある生活に挑戦する場合でもまた事業に蹉跌した場合の真剣な努力も皆一かバチかのいわば命を賭した冒険である。この苦しい現実の生活のために、せめて子どもには安易の道を進ませたいと願う気持ちも分らないではないが、余りにも保護された安易の道に子どもをおいていると、子ども自身の生活の歩みにマイナスとなる。